

---

# 黒狼の朱

夕月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒狼の朱

### 【Nコード】

N80290

### 【作者名】

夕月

### 【あらすじ】

黒狼と呼ばれる他者を嫌う不良 黒木継 男嫌いな不良のレツテルを張られた少女 宮村朱音 春 入学式の日 屋上で出会った二人 その出会いは最悪だったでも少しずつ二人の距離は近づいていく 癒えることのなかった心の傷は近づくにつれ癒えていく 2人は何時しか互いを想い合う

アルファポリスのバナーをクリックしていただけると励みになります



## 人物紹介（前書き）

すいません18禁の方に投稿してたので  
投稿し直します

ではどうぞお楽しみください

## 人物紹介

主人公

黒木 継くろき けい

男 16歳 高校2年生

身長179?

髪色 黒 髪型ポニーテール

目の色 黒

左目に縦に切り傷がある

常に黒色のリングのネックレスを付けている

ある事件で基本的に他者を嫌う

無感動

ある事件以来強さなどに執着するようになった  
黒狼と恐れられている

ヒロイン

宮村 朱音みやむら あかね

女 15歳 高校1年生

身長157?

髪色 赤(地毛)

髪型 ロングストレート

目の色 黒

基本的に男が嫌い

勉強は授業を聞いていないので出来ない

愛歌と中学からの仲で愛歌と同じ高校に入る

性格は荒っぽく 喧嘩もし強い 不良少女のレッテルを貼られている

甘いものやぬいぐるみなどが好きだが不良と呼ばれているので愛歌以外には隠している

沢田さわだ 紫苑しおん

男 16歳 高校2年生

身長172?

髪色 茶 髪型ミディアム目の色 茶

女顔 女顔なのでよく女に間違えられる

女顔を指摘されると怒る継とは中学からの仲  
喧嘩も強いほう

中学から不良

継が不良になった理由を知る1人

堂島 どうじま 京男 きやうお 16歳 高校2年生

身長177?

髪色 金 髪型ミディアムストレート

目の色 黒

継と紫苑は中学3年の時に出会い仲良くなった

家のことで悩んでいた時に継と紫苑に救われ  
恩を感じている

紫苑をよくいじる

喧嘩はそこそこで

情報量が凄く色んな人の弱みを握っていたりする

柊 ひいらぎ 愛歌 あいか

女 15歳 高校1年生

身長153?

髪色 黒

髪型ミディアムショート目の色 黒

朱音の親友

朱音とは中学からの仲

中学の時虐めを受けていたが朱音に助けられた

朱音を大切に思っている

男によくナンパなどされ朱音にいつも助けられている

**第1話 不良散る入学式（前書き）**

感想等是非よろしくお願いします

## 第1話 不良散る入学式

春

桜が咲き始めた入学式の日

新入生や在校生が高校へと歩を進める道

二人乗りの自転車が人を避けながら走っていく

自転車が校門に近付いた所で運転していた紫苑が荷台に乗っている  
継に話しかけた

「なあ継 何かさ校門の前に他校の不良溜まってんだけど あれ俺  
ら目当てだよな どうする？」

「ああ？ ああ学校内で騒がれるのも面倒だから このままスピー  
ド上げて逃げ」

「逃げつてマジで いや下手したら大怪我じゃねそれ」

「知らん」

「知らんつてまあいいか」  
そう言つてスピードを上げる紫苑

どンドンと自転車はスピードを上げ

ガッシャーン

溜まっていた不良を思いつきり挽いた

「いてえなコノヤロー何突っ込んできてんだよ  
つててめえ沢田と黒木だなこの前の借り返しにきたぜ」

挽かれた一人が吠え次第に挽かれた不良達は自転車から降りた紫苑と継を囲むように立ちふさがる

「あーあ チャリ壊れたかも まあいいか てかお前らウルサイ  
入学式にまでくんなよ」

「関係ねえ てめえらボコんねえと 下のもんに示しがつかねえん  
だよ」

「たかだか2人相手に5人も引き連れてきて示しもくそもないじゃ  
ん んじゃやりますか継」

「あぁめんどくさいけど潰すか なっ」

「カハッ」

言い終えながら不良の1人に跳び蹴りをかます

「ぐっ」

「あがっ」

「はいこつちも2人アウト」

継が1人氣絶させてる間に

紫苑が2人不良を気絶させる

「テメエ黒木死ね」

ブンツ ガツ

不良の拳が継の頬に入る

「グツ てえっな」

ドスッ ガツ

腹に蹴りを入れつつ回し蹴りを頭にキメる

「ガツ ケホツ くそつたれ」

ドカツ

「オエツ」

「もう一人アウト」

紫苑がまた1人潰し

残りは吠えていた不良1人

「くそつマジかよこんなあっさり」

「勝てる訳ないじゃん仮にも継は黒狼なんて恐れられてるし 俺も強いしでどつする？」

「くっくそっ」お前らそこで何してる「あっ？」

継達がいる校門に4、5人の教師が走ってきていた

「ああくそっ時間かけ過ぎたな 今日引いてやるけど必ず潰すからな オイ起きろお前ら逃げんぞ」

残った1人が気絶していた5人を起こして

入学式の校門に向かって歩いてくる学生を押しつけて逃げていった

残された継と紫苑に辿り着いた教師達の1人が怒鳴った

「黒木に沢田めでたいこの入学式に問題起こしやがってなめてんのかあ」

「ウルセエナ 俺らがやんなきゃ他の奴らに襲いかかってたかも知れねーだろが」

「大体溜まってんの知ってて来なかったアンタらが悪いでしょ」

喧嘩をして集まっていたギャラリィが継と教師達の喧騒に嫌な顔をしながら学校内へと入っていく

「くっ教師にタメ口聞きやがって お前ら職員室に来い」  
それを見た教師達は継達を職員室に連れて行くとした

「はあく 仕方ない教師達は来なかった事実を隠したいみたいだし  
言うこと聞いとくか 職員室に行くか紫苑？」

「まあ仕方ないか 大人は隠したがるからなあ」

「五月蠅い黙れ いいから 来いお前ら」

2人を引き連れて教師達は職員室へと向かっていった

## 第2話 黒狼と朱の邂逅

職員室

side 《継》

椅子に座る教師に怒鳴られている2人

「今回は私達が来るのが遅かったのも非があるからお咎め無しとするがまた同じ様に問題起こすなよ分かったな 黒木沢田」

「ああ」「ハイハイ」

「ならもういい式にはちゃんと出るよ」

「邪魔した」ました」

ガラガラ

パンっ

そう言っつて

俺と紫苑は職員室を出た

職員室でのやり取りで考えてしまう

大人は汚い何かと問題を隠そうとする  
いや大人だけでもないか他人はみんな冷たく残酷なもんだっ たな

考えていたら紫苑に話しかけられていた

「継は式でる？ 京は式出るってさ さっきメールきてた 俺も出るつもりだし」

「いや俺はいい屋上にでも行って風にあたってくる」

「そっかんじやまた後でな継」

「ああ」

紫苑とは別の道に行つて屋上を目指す

屋上

俺はフェンス越しに校門に咲く桜を眺めていた

「見てるか真白もうあの日から四年も経つちまった 早いもんだな  
真白 もし生きていて高校に通つてたら俺達はど・なつてたんだろ  
うな」

呟いても（どうなつてたんだろうね）なんて答え帰つてこない  
そう分かつていても  
未だに呟いてしまう

屋上から見る桜の景色

他の奴が見たら綺麗だねなんて言うんだろう

俺にはもう綺麗なんて思わなくなっちゃった

「近いうちに墓参り行くからな」

キィー ガチャン

屋上の唯一の出入り口から突然扉が開く音がした

俺等以外にはここは来ないはずだし京か紫苑が式を抜け出してきた  
んだろう

そう思って振り返った俺の予想は全く違っていた

屋上の扉に居たのは赤色の長い髪をした  
不機嫌そうな女だった

しばらく呆然と眺めていたら赤い髪の女が話しかけてきた

「チツなんだよ 先客居たのかよ」

「……………新入生だろ今は式のはずだったか何故ここにいる？」

何で声をかけてんだ俺が嫌いな他人だぞ

「ああ なんだよ？別にどこにしようがあたしの勝手だろうが 大体お前だってサボってこんなところにいるじゃねーか」

「……………よくしゃべる奴だな」

「お前から話しかけてきたんじゃねーか ああムカつく シネっ」

いきなり赤髪の女が殴りかかってきた

ブンッ

横からのフックを後ろに下がって避ける

「くそっ よけんなつての」

ブンッ ブンッ

がしッ ぶおん ドサッ

二発目のストレートを横にズレて伸びきった腕を掴み一本背負いして地に伏した赤髪の女の腹に座る

「くそっ重いどけよっ」

「いきなり殴ってくるな 危ねえ」

「うるせえ ム力つくんだよあたしに命令すんなあ」のし掛かられた状態でもなお逃れようと暴れる赤髪の少女を見て過去の自分と重ね合わせてしまった

今日のはあの日のことをよく思い出す日だななんて思いながら自分の下で喚く女を見やる

「くそついい加減離せつてんだ 糞つ くそ」

喚いていた女が段々と肩を震わせながら抵抗する力を無くしていった俺は殴られる事はないと判断して

女の腹から腰を上げて2、3歩離れた位置に立つ

赤髪の少女は上半身を起こし自身の両肩を抱くようにして体を震わせながら小さく

大丈夫だと何回も繰り返して呟いていた

そんな様子を見て俺が何かをしてしまったのは分かったが声をかけることも出来ないし

所詮他人なのだからと少女の側で胡座を掻き空を見上げた

少女を気にせず屋上から出て行く事も出来たが

何故だかそれをする気が起きなかった

他人なんて嫌いなのにな

そうしてしばらく

小さく大丈夫だと呟きながらどこか怯えた風な少女と胡座を掻きながら空を見上げていた俺

きつと今紫苑や京がこの現場を見たら訳わかんねーなんて言うだろう

こんな他人から見たら訳分かんない状態で何分居たんだろうか

日は朝より登り昼近くなんだろう

校門近くが騒がしくなっているから入学式は終わって思い思いに帰り始めているんだろう

それならそろそろ紫苑達が来る頃だろうから

未だに怯えている少女をどう説明するかのんびりと考えているときに

キィー ガチャン

ドアの開く音がした

まだ何て説明するか考えてなかったんだがなあ

まあいいかと若干諦めたように

京と紫苑が訳の分からない顔をして立ち尽くしているだろう扉を見  
やった

・・・・・・・・・・・・・・・・また知らない女がいた

何だって今日は予想外なことが連続で起きるんだ

俺じゃなかったらリアクションに疲れる日だな今日は

俺は扉の前で立ち尽くす女を見やる

少し小さく感じる身長に整った顔立ちに黒髪が映えるんだと京なら  
熱弁しそうだ

多分モテるだろう女

あの赤髪の女もそういや雑誌とかに載ってそうな整った顔立ちして  
たな

今京が居たら赤髪の女と黒髪の女2人をナンパしそうだ

ふと黒髪の女と目があつた

扉の前で少しビックリしていた黒髪の女は直ぐに俺に向けていた視

線を

多少落ち着いたらしい赤髪の女に向けた

「朱音ちゃんどうしたの？」

赤髪の女の様子が変わることに気づいた女は直ぐに駆け寄って声をかけた

「ああ愛歌か 大丈夫だよ」

黒髪の女が愛歌で赤髪の女が朱音という名前のようだ

「嘘だよだって朱音ちゃん少し顔青白いもん あそこにいる人に何かされたの？」

「……………違うから本当に大丈夫だから」

「本当に？大丈夫今度は私が朱音ちゃんを助けるから頼りないかも知れないけど言ってる」

何だか面倒くさい事になる前に愛歌と呼ばれる少女に話しかけた

「……………あゝ

まあやし掛かっちゃったけど

手は挙げてないからな」

話しかけられた愛歌は怒った顔をしていた

「のし掛かったってそんな  
朱音ちゃんに何するんですか？」

「その赤いのが殴りかかってきたから  
落ち着かせようと投げて動けないように  
乗っただけだ殴ろうともしてないし襲おうともしてない」

頭に血が上った愛歌は投げられたと言う単語しか頭に入らず継を怒  
鳴ろうとした

「投げたってなんでそんな「もういいんだって愛歌ソイツが言っ  
るのは正しいんだ 頭に血が上って先に手を出したのはあたしだし  
ソイツはそれ以外何もしてないんだ」  
そんな愛歌に朱音が諭すように言った

「だったら何で泣いてるの」

「抑えられててあの時の事思い出したただけだ もう大分落ち着いた  
しほんとに大丈夫 だからもう帰ろう愛歌 おばさんだって待つて  
るだろうし なっ？」

「……分かった そうだね朱音ちゃん あっそうだどこか  
でお昼食べようよ」

愛歌は朱音に微笑みながら言い

朱音もさっきよりは幾分か良くなった顔を笑顔にしながらかえす

「ああ分かったじゃあ早く行こう愛歌」

未だに胡座を掻いていた継から去るように  
屋上の扉に向かっていった2人

愛歌と呼ばれる少女が扉から出る前に継の方に振り向いて

「怒鳴ったり失礼な事言つてごめんなさい」丁寧にお辞儀をして  
出口に吸い込まれるように出て行った

その次に出ようとした朱音と呼ばれる少女が一瞬継の方を向き直ぐ  
に扉に扉吸い込まれるように出て行った

キィー ガチャン

2人が扉の向こうに消えるのを見送った継

「疲れた」

こんなに疲れるなら真面目に式に出とくべきだっと思いつながら

胡座を解き屋上の床に寝転ぶ継

桜の花びらが風に乗るまで黒狼と朱の邂逅を祝つかのように舞っ  
ていた

### 第3話 宮村朱音

入学式の朝 アパートの一室

side 《朱音》

アパートの一室で赤髪の少女がベッドの上で寝ていた

ピピッ ピピッ ピピッ

少女の枕元にあったケータイが午前七時を持ち主に告げるために規則正しく鳴り始めた

「んっ んっ ふああっ よいしょっと 眠いっ」

あたしはベッドから起き上がりながら未だに鳴っているケータイの目覚まし機能を止めた

それから顔を洗ったり歯を磨くためにまだ眠い目を擦りながら洗面所に向かう

ジャアアアアア キュッ

歯を磨き終えて一度パジャマのポケットに突っ込んだケータイを取

り出して時刻を確認する

7時10分

よし愛歌とおばさんが来るまでまだまだ余裕はある

パジャマを脱いで昨日のうちに出しておいた  
真新しい高校の制服に着替える

着替え終えてまたケータイの時計を見る

時刻は7時20分

愛歌達が来るまでにあと15分余裕があるから  
温かい紅茶でも飲もうと小さいキッチンのガスコンロでお湯を沸かす

25

ヒューー　カタカタカタ

沸いたお湯をティーパックの入ったカップに注ぐ

のんびりと紅茶を飲んで空になったカップをキッチンに水に浸して  
置いて  
濡れた手をタオルで拭き終わった時に丁度アパートの呼び出し音が  
鳴った

愛歌達が来たと思いい急に鞆を持って玄関のドアを開ける

ガチャ

ドアを開けたそこにはやっぱり愛歌達だった

「おはよー 朱音ちゃん」

「おはよう あーちゃん」

朝の挨拶をされたので愛歌とおばさんにそれぞれ挨拶を返す

「おはよう愛歌 おはようございませすおばさん いい加減あーちゃんはやめてくださいよ 恥ずかしいんで / / / / /」

「えー良いじゃない あーちゃん 可愛い呼び方でしょ ねえ愛歌？」

「うん可愛い呼び方だと思うよあーちゃんって」

おばさんが愛歌にまで同意を求めてあっさり愛歌がそれを認めてしまった

正直あたしは嬉しさ半分恥ずかしさ半分だ

「愛歌まで大体あーちゃんっておばさんしか言わないじゃないですか」

「フフフツ いいじゃない」

「はあくもついいですよ今に始まった事じゃないし それよりさっさと行こう愛歌 おばさん 学校見て回るんでしょ」

そう言つて恥ずかしさを誤魔化すために急いでアパートの鍵を締め2人を置いて先に学校へと向かうあたし

多分あたしの照れ隠しだったのを愛歌と愛歌の母親であるおばさんは分かつていたんだろう

2人が顔を見合わせて微笑んでいたのがチラツと見えた

高校内

あたしと愛歌とおばさんは8時ちょうどに学校に着いた

おばさんは先に式が行われる体育館に向かった

残ったあたしと愛歌は迷子にならない程度にこれから三年間を過ごす学校内を見て回った

「結構見て回ったね時間も8時20分になったしクラス分けの見て教室に行こっか朱音ちゃん」

「ん〜 ああそうだねそろそろ時間か」

2人でクラス発表されている紙を見に行った

結構な数の人がいて見づらいのを我慢して自分の名前を探す

宮村朱音わつと あった

一年二組だ

愛歌は何組何だろうか

何て考えていたら愛歌も見つかったみたいだ

「あっあった ねえ朱音ちゃん何組だった 私は二組だったよ」

「へえ〜 やったね愛歌一緒のクラスだ」

「本当に やったよ 朱音ちゃん また一年間よろしくね」

本当に嬉しそうな笑顔をして愛歌が大きな声で言うもんだから  
周りに居た同級生がチラホラ見てきた

何人かの男は愛歌を見て可愛いだの何だの言って騒いでいたから  
睨みつけたら直ぐに顔を逸らしてその場から離れていった

情けない奴ら

男はバカで最低だからあたしは嫌いだ

また愛歌を守ってやらないと

愛歌を襲おうなんて口クな事考えない奴が現れちまうから大変だ

「どうしたの？朱音ちゃん具合悪い？」

「んっああ全然平気　また一年よろしく　愛歌　さっさと二組行こう」

「大丈夫なら良かった？　うんそうだね早く行こう」

まだ人が群がるクラス分けが発表されている場所を後にして  
あたしと愛歌は二組の教室へと向かった

「……………え、それじゃあこれから一組から順番に体育館に入場するから全員廊下に出ろ」

自分の席について担任が来るのを待っていたあたしは男の担任が話し始めてからすぐに眠ってしまったみたいだ

ああ式に出んのめんどくさいなあ

サボるかな よしサボろう

あーでも愛歌心配するしメールしとくかな

ケータイを担任にバレないように取り出して愛歌に屋上にいるとメールした

すぐに前の席に居た愛歌が静かにケータイを開いていた

メールを確認したようであたしの方を向いて軽くうなずいた

クラスメイトがぞろぞろと廊下に出て行き並び始めた

あたしは担任にトイレに行くと嘘をついて

朝見て回った時に鍵が開いているのを確認した  
屋上に向かった

屋上に行くため階段を登っていた朱音

階段の途中で上から下へと降りてくる三人の男子生徒が登っていた  
朱音の前を遮るように立つ

横にずれても抜ける隙間が無く仕方なく朱音は止まり前を遮る三人  
に言い放つ

「邪魔だからどけよ」

そんな朱音の物言いに驚いた顔をした三人はすぐにニヤニヤとした

ニヤニヤとしていた1人が朱音の肩に馴れ馴れしく触れ言う

「きみさく新入生だろ 迷子になったんでしょ俺たちが体育館まで  
案内してあげるよ その代わりにメアド教えてよ ねっ?」

返事も返していないのにアドレスを交換する準備をする男

朱音はそんな男や後の2人にイライラしだす

「ほら ケータイだしてよアド交換 こっちが赤外線受信するから」

人の返事も聞かず勝手に交換すると思っている男と後の2人は朱音がイラついているとは夢にも思っていない

そんな男たちの様子に遂に朱音がキレた

「あああゝ うっぜーな糞ナルシストやろうがシカトしてんのに勝手に話進めやがって ふざけんなんての 死ね らっ」

ゴッ

「ひっ あっ 痛っ」

「てめえ等もニヤニヤキモいんだよ シネっ」

ガッ ゴスッ

三人にそれぞれ一発蹴りをいれる

蹴りに耐えきれず倒れ込む男達

倒れ込んでも階段は遮られて通れず

そんな男達に朱音はドスを利かせ睨みながら一言  
「どけ」

それだけでさっきまで調子にのっていた三人は急いで道を開け

階段の端を滑るように降りていった

ああクソムカつく

あたしが女だからってなめたことしやがって

だから男なんか嫌いなんだ

三人組を蹴り飛ばしてもイライラは消えずに  
ズカズカと階段を登り

屋上のドアを開けて屋上へと出た

屋上には先客がいたみたいだ

黒い髪の男が振り返ってあたしを見て驚いた顔をしていた

さっきの事と先客が男だった事で怒りが治まらずつい愚痴る

「チツなんだよ 先客居たのかよ」

愚痴ったあたしに男が話しかけてきた

「……………新入生だろ今は式のはずだったか何故ここにいる？」

先客の男は二年か三年らしい

自分だって式に出てなきゃおかしいのについてカツとなって男に言い放つ

「ああ なんだよ？別にどこにしようがあたしの勝手だろうが 大体お前だってサボってこんなところにいるじゃねーか」

「……よくしゃべる奴だな」

「お前から話しかけてきたんじゃないか ああムカつく シネっ」

キレて殴りかかるあたし

ブンッ

この野郎強い

当たると思った拳は楽々と避けられて

「くそっ よけんなつての」

焦ったあたしは更に畳みかける

ブンッ ブンッ

がしッ ぶおん ドサッ

二発目のストレートを避けられ伸びきった腕を掴まれ  
気づいたらあたしは宙を舞って男に動けないように腹に座られていた

「くそっ重いどけよっ」

何だよこいつ強い

「いきなり殴ってくるな 危ねえ」

「うるせえ ム力つくんだよあたしに命令すんなあ」  
男の拘束から逃れようと暴れる

「くそついい加減離せってんだ 糞っ くそ」

全然逃れられなくて

ふと過去の出来事が蘇って

体が震える

怖い 怖い男が怖い

段々と力が抜けていって遂に抵抗できなくなった  
襲われると思った

けれど襲おうともせず

男は暴れなくなったあたしから少し離れた位置に立つ

あたしは上半身を起こし両肩を抱くようにして体を震わせながら

大丈夫だと何回も繰り返し呟く

震えは止まらずまだ怖い

もしかしたら男は仲間を呼んだのかも知れない

それなら早く逃げなきゃいけないのに怖くて逃げる事ができない

逃げられずに何分たったのかも分からず

男と震えるあたし以外には人は来なくて

いつの間にか男はあたしの側に座っていた

そうしてまた時間はたっていて日は朝より登り昼近く

とうとうあたしと男の他に人がきた

キィー ガチャン

あたしはせめて襲われても最後まで抵抗しようと思っただに震える体を無視して覚悟を決めた

.....扉に立っ

たのはニヤニヤと笑う男の仲間じゃなくて

あたしがよく知る大事な親友の愛歌だった

愛歌が直ぐにあたしの側に駆け寄ってきて

あたしの心配をする愛歌に男が面倒くさそうに言う

「.....あゝ

まあもし掛かっちゃまったけど

手は挙げてないからな」

男の言葉を聞いて愛歌は怒った顔をしていた

「のし掛かったってそんな

朱音ちゃんに何するんですか？」

滅多に怒ることのない愛歌があたしの為に怒ってくれているのが嬉しかった

今回の事はあたしが悪い  
愛歌が怒りながら男にさらに言い返そうとしたところを遮って  
宥める

実際男はあたしが抵抗しなくなったら何もせず  
ただ側にいて胡座を掻いて空を見上げていただけだった

泣いている理由を聞かれ理由を答えおばさんの元へ向かおうといった

愛歌はあたしに微笑みながら了承してくれて  
ご飯を食べに行こうと言ってくれた

さつきよりは幾分か良くなった顔を笑顔にしながらあたしもかえす

「ああ分かったじゃあ早く行こう愛歌」

立ち上がり

屋上の扉に向かうあたしと愛歌

愛歌が扉から出る前に男の方に振り向いて

「怒鳴ったり失礼な事言つてごめんなさい」丁寧にお辞儀をして  
屋上から先に出て行った

あたしは屋上からでる前にあたしが喧嘩で負けた男の方を一瞬だけ  
見て

直ぐに愛歌の後を追った

襲われなかったけどやっぱり黒い髪の男への評価は変わらない

男なんてみんな大っ嫌いだそれは変わらないしこれからも変わらないだろう

学校近くのファミレス

窓際の席にあたしは一人座りテーブルを挟んだ向こう側におばさんと愛歌が座る

「あゝあ 愛歌の写真は撮れたけど あゝちゃんの写真撮れなかったなあ」

そうおばさんが拗ねたようにあたしに言う

「だって式出るのめんどいかったんですもん それにそもそもよその子撮ったって無意味ですよおばさん」

そう返したあたし

「えー あゝちゃんはもう1人の私の娘じゃない 何言ってるのよなんてキョトンとした顔で返された

「そうだよ朱音ちゃんは私のお姉ちゃんみたいなものだよ」

さらに愛歌にまで追い討ちをかけられた

「うう それはない だってあたし不良だし愛歌と違って女の子ら

しくないし」

「そんなことないよ だってぬいぐるみとか集めてるし甘いもの好きだし なんだって可愛いし 十分女の子らしいよ」

「そうそう」

なんて愛歌とおばさんにさらに追い討ちかけられて

「っ／／／／／／／／」

赤面してしまうあたし

屋上での出来事がまるで無かったようにのんびりとても幸せな時間

可愛いなんて愛歌とおばさんしか言わないから

未だに三年の付き合いなのに未だに恥ずかしい

教師や同級生はあたしを不良と呼ぶし

あたしも強くありたいから不良で在ろうとする

今まで男に完敗なんて無かった

引き分けることはあった

負ければ女は何されても可笑しくはなかったから  
けど今日会った男はまるで齒が立たなかった

屈辱的だこんなんじや愛歌も守れない

どこの学校にだって大抵不良が居るのに

あんな簡単に倒されてたら駄目だ

必ずリベンジしようと決心した

「ねえ朱音ちゃん もう帰るよ お〜い」

「へっ ああゴメン うん帰ろう あれおばさんは？」

「買い物があるからちょっと前にお金払って帰ったよ 行こっ」

随分考え込んでたみたいだ

おばさんにお金を払ってもらったあたしは愛歌とファミレスを出て  
途中まで一緒に帰った

自分の家に帰って軽めの夕食を食べて

お風呂に入って

パジャマに着替えてベッドに潜り込んだ

すぐに眠たくなってあたしは意識を手放した

## 第4話 告白

side 《継》

入学式の日はいろいろ疲れた

あの後紫苑と京が来てから

飯を食いに近くのファミレスに行つて

夜までファミレスで時間をつぶして

する事がないから夜の街を三人でぶらついてたら

どっかの族と喧嘩になってボコボコにした後

警察に負われる羽目になって

警察から逃げて

警察を撒いた後は疲れてその日は家に帰って寝た

入学式はちょうど土曜で休めると思ったけど

日曜日も結局同じ感じだった

んで今日は真白の墓参り行くために迎えに来てた紫苑を先に学校に行かせバイクで墓地に向かう

現在の時刻は月曜日の朝8時

俺は神木家の墓を掃除していた

こまめに手入れされている墓は年期を感じさせるものはあるがキチ

ンとしていた

持ってきていたプリムラの花を備え付けられている花瓶に飾る

ピンク色をした花

真白

が一番好きな花だと言っていた

「・・・・・・・・・確か花言葉は無言の愛だったよな真白」

風に吹かれて

そうだと言わんばかりにプリムラの花が揺れる

「やっぱり言葉にしてくれなきゃ寂しいもんだろ」

答えなんて返ってくるはずがない

分かっているも同じ事を繰り返してしまう

もう一度繼って呼んでくれるんじゃないかって有り得ない事を想い

続けてしまう

ジャリ

「つつ 誰だ」

突然靴が砂利を踏む音がした

振り向いた先にいたのはあの事件の時の刑事のオッサンだった

「いよゝ非行少年

真白ちゃんの墓参りか 奇遇だね」

「うるせえ 無能 てめえらは力のない悪人でも捕まえとけよ」

継は眉間の皺を隠そうともせず言い放つ

「こいつは手厳しい これでも色々忙しくてね 去年の冬に来れなかったから今日来たって訳よ」

刑事は飄々と答える

「今度は夏にくるな

……無能の話に興味なんかねえよ」

刑事の話聞き流し

墓の下に居る真白に語りかけ

ゴミを持って刑事の横を通り抜け墓地を後にする継

墓地に残ったのは刑事1人だけ

刑事が神木家の墓の前に座り墓石に水をかけ

手を合わせて黙祷し墓に語りかける

「真白ちゃん冬に来れなくて悪かったね」  
そうつぶやいた後心の中で真白に語りかける刑事

アイツは段々と闇に捕らわれていつてるな真白ちゃん  
初めて会った時はまだ人らしい目をしてたけど

今はまるで狂った獣の様な目だ  
多分真白ちゃんが知ってるアイツとは大分変わっちゃまってるよ

ゴメンな真白ちゃん約束守れそうにない  
おじさんにはアイツを救ってやることは出来そうにないよ

真白ちゃんの敵をとることもまだ出来そうにない

「また来るよ どうかアイツを見守ってて上げてな真白ちゃん  
アイツが本当に人じゃ無くならないように」

ザッ ザッ ザッ ザッ

そうして刑事も去り神木家の墓には誰もいなくなった

花瓶のプリムラがユラユラと優しい風に吹かれ静かに揺れていた

墓参りを終えた俺はバイクを家に置き  
学校に登校した

学校に着いたのは  
ちよつと3時間目が終わって休み時間になった所

下駄箱で上履きに履き替えていた時  
女子に声をかけられた

「あつ あの黒木君 ちよつといいかな」

声をかけた相手を見ると相手は多分同じクラスの女子だった

上履きに履き終えて  
女子に返事をする

「ああ 何か用か？」

「つつ えつと その あの」

モジモジとしてなかなか用件を言おうとしない女子から視線を外し  
辺りを見回すと丁度女子の後ろに居る女子と目があった

確かあそこに居んのも同じクラスだよな

すぐに興味を無くし未だにモジモジしている女子に視線を移す

パツと俺に顔を向け何か決心がついたような目をして言葉を発した

「あの私前に助けられた時から黒木くんの事が好きなんです その  
私と付き合ってくださいませんか」

告白した女子は澄んだ瞳で真っ直ぐに継の瞳を見る

告白された

普通は悩むんだろつが答えは決まっている  
少し間をおいて告白の返事を返す

「……………付き合えない」

「……………そうですか あの理由を聞いてもいいですか？」

そう涙目になりながら聞いてきたので淡々と答える

「付き合う資格がない」

「……………そう……………ですか 迷惑かけてごめんなさい  
黒木くん」

そう言つて涙を流し走つて去つていく女子

その後を急いで追いかけるもう1人の女子

2人の女子が廊下の門を曲がったのを確認し終え俺は2年の教室に  
向かおうと階段を登っていく

1階と2階の間に京が壁に寄りかかるように立っていた

「ひつどい振り方をするもんだねえ 継君 あれじゃく逆の意味に  
捉えちゃつてるよあの子」

「何だよ見てたのか どうゆう意味だ京」

はああ〜と溜め息を吐く京

「継は継自身に資格が無いって意味なんだろうけど あの子が継と付き合う資格が無いって捉えられてるよ」

ああだからあんな泣いて去っていったのか

「まあ………いいか」

「ひどいね〜継君 かなり人気のある子なのに もったいない」

はははっと笑いながら京が言ってきたので俺も言い返す

「女遊びの激しい京に言われたくねえんだけど」

「うっわっそれ指摘しちゃだめでしょ継」

「事実だろ」

「きつついね〜 おっもう4時間目始まるじゃん いこっぜーけ〜  
いくん」

「ああ」

休み時間終了のチャイムが鳴り

京と一緒に2年1組へと向かう

2年1組の教室の前に着くと既に授業が始まっていた

ザワザワと騒がしいクラスの中で授業を続けていく老教師

廊下側だと生徒が隠れて漫画を読んでいた

ケータイをいじっていたりした

中にはキャッチボールをしたりしている奴らまで居る

それでも老教師は注意することなく授業を続けていく

「ラッキ〜 じいさんの授業じゃん しっかり遅れてくると入りづ  
らいもんがあるな〜 継」

ガラガラ

「別に何ともねえだろ」

気にすることなく教室のドアを開け中に入っていく

京が何か言いながら続いて入ってくる

「うおっ ちよっ 躊躇うことなく入りますか」

俺と京が入った瞬間に教室は静かになった

生徒はおろか騒がしいクラスを気にせず授業をしていた老教師まで

授業を中断した

生徒達はは繼に視線を合わせ動向を窺う

「黒木に堂島授業は始まっているから 席に座りなさい」

老教師は遅れてきた事を気にする風もなく俺たちに席に座るように促す

「遅れちゃってゴメンねじいちゃん」

京は老教師に詫びて先に席につく

「じじい悪かった」

俺も老教師に詫びて自分の席につく

それを確認した老教師は中断した授業を再開する静かになっていた  
教室も元の騒がしさに戻り

生徒達は思い思いの事をしだす

繼は4時間目を色々な色で彩られた黒板を眺めて過ごした

## 第5話 呼び出し1（前書き）

第五話目更新いたしました

感想等ぜひお願いいたします？

では第五話どうぞ

## 第5話 呼び出し1

side 《継》

キーンコーンカーンコーン

黒板を眺めて過ごしていたら

4時間目終了のチャイムが鳴った

号令係が号令をして授業が終わりそれぞれが昼休みに入る

授業が終わるとすぐに京が俺の席に来た

「継、今日はパンでも買って屋上で飯食わね」

「京に任せる」

「了解、んじゃ屋上で食べようぜ、紫苑もそろそろ来る頃だろうし

、紫苑が来たら行きますか」

京が話し終えた所で丁度紫苑が教室のドアの前に立っていたのが見え  
えた

すぐに紫苑が教室に入ってきて俺たちの所に来ながら喋る紫苑

「継に京早く飯食いに行こうぜ席が無くなる」

紫苑が来た事に気づいた京が紫苑の方に振り向き返す

「今日屋上で飯食うからな紫苑」

「おつ そつかじゃあ早く屋上行こうぜ継 京」

「ああ けどその前にパン買わねえと」

「そうそう継の言うとおり焦んなよ紫苑 しっかし今日も可愛いねえ紫苑ちゃん女子みたいだ」

「ああてめえ誰が女だ 京ぶっ飛ばす 待てや」

京が笑いながらやーだと言いながら逃げた事で  
2年1組で2人の鬼ごっこが始まる

鬼ごっこを眺めて終わるのを待っていたら

突然放送が入った

ブツ

(えゝ2年1組 黒木継 1年2組 宮村赤音 至急職員室にきなさい 繰り返し 2年1組 黒木 1年2組 宮村 至急職員室にきなさい)

ブツ

「継お前何したんだ？」

「うわゝドンマイけゝいくん」

いつの間にか鬼ごっこを止めて俺の隣にいた京と紫苑

「うおっ あゝまあ行ってくるわ俺の分買って先行っててくれ」

「うおって珍しい継がビックリするなんて」

「あいよ継 いいからさっさと行くぞ京」

「うおっ ちよっせっかちすぎるでしょ紫苑」

紫苑は京の襟首を掴み引っ張って教室を出て行った

俺も職員室に行くか

職員室前の廊下で入学式に会った赤髪の少女が何故かいた

少女が俺を見た瞬間嫌そうな顔をして口を開いた

「最悪だ何でこんな所でお前に会つんだよ」

「こつちだつて来たくてこんな所にきてんじゃねえよ赤いの」

そつため息を吐きながら言い返してやる

またか何だつてコイツには話しかけちまうんだろつな無視すりゃいいのに

「あゝあゝ 誰が赤いのだ てめえあたしには宮村朱音つて名前があるんだよ」

「ああ何だお前も呼び出されてたからこんな所にいたのか」

呼び出されてた1年はこいつだつたようだ

「だからあたしの名前は宮村朱音だつつの ほんとにムカつくなあんだ つてかあんたが呼び出されてた2年かよ」

更に眉間に皺を寄せて嫌そつな顔をして言つ宮村

このまま赤いのかお前と呼んでいるとまた殴りかかつてきそつだつたので仕方なく名字で呼ぶ

「それを言つなら宮村もお前やらあんたと呼ぶだろつが」

「うつ それはあんたの名前知らないんだからしょうがないだろ」

バツが悪そつに言い返してくる宮村

「まあ確かにそうだな あゝ黒木継だ よろしくするつもりはない」  
相手が名乗ったのにこっちが名乗らないのもおかしいから  
嫌々だが名乗る

「くゝいちいちムカつくな あたしだって男と仲良くするつもりな  
んて無いさ」

「レズか？」

「違うつての 男が嫌いなだけだ 特にあんたみたいな男はね大嫌  
いだ」

廊下とはいえ職員室前で騒ぎすぎたようで 職員室に居る何人かの  
教師が俺と宮村の言い合いを何事かと眺めていた

「同じだろ そろそろ職員室に入るぞ 騒ぎすぎた」

「違うつての ツチ 分かってるよ早く終わらして愛歌とご飯食  
たいし」

舌打ちをしながら嫌々同意する宮村

ガラガラ

職員室のドアを開けなかに入る俺と宮村

すぐに1人の教師がやってきて俺たちを生活指導の教師の所へと案内する

案内したあとすぐに教師はどこかへと行き

俺と宮村が生活指導の教師の前に立って  
筋肉だらけの教師が話し出すのを待つ

「黒木に宮村お前ら2人が呼びだされた理由分かっているな」

筋肉だらけの生活指導担当の教師が話し出す

「知るか」

俺は即答し

宮村は少し考え

分かりませんと答えた

そんな答えが気に食わなかったのか筋肉教師が額に青筋を浮かばせ  
怒鳴る

「分からないだとく お前等はな入学式の日に式をサボったから呼  
び出されたんだよ」

「うるせーよ脳筋バカ 大声出さなくても聞こえてる」

教師の馬鹿でかい怒鳴り声に俺も宮村も顔をしかめる

「黒木教師に対してなんだその口の効き方は？」  
また大声で怒鳴る教師 職員室内にいる教師が全員様子を窺っている

「はっ 教師だからって偉そうにしてんなよ グッ」

ゴツ ガシャーン

脳筋バカに反論していたら いきなり立ち上がって  
殴りつけられ反応できずに後ろに倒れる

「大人なめてんじゃねえぞ黒木 殴られないとでも思ったか ア  
ッ」

「つつ うるせえってんだよ てめえこそガキなめてんなよ」

俺は脳筋バカを睨んだ

脳筋バカも俺に睨み返してくる

「このガキっ」まあまあもうやめなさい」 こっ 校長」

また殴りかかろうとする教師に待ったをかける老教師

「さっきのは教育ではなくただの暴力ですよ 先生」

「お言葉ですが校長 っ」「先生 私がやめなさいと言っているの  
だから止めなさい ここで止めなければ先生の立場が危うくなりま  
すよ 後は私がやりますから」

「わかりました校長 失礼します」

そう言つて去つていく生活指導の教師

教師に待つたをかけたのは校長だつた

その場に残つたのは校長と俺そして今までじつとしていた宮村だけ

遠くから他の教師が様子を窺う状態で職員室内はとても静かだ

「小林先生がすまなかつたね え〜と宮村さんと黒木くん」

静かな職員室で口を開く校長

「いえ別に黒木みたいに殴られてませんし大丈夫です」

淡々と校長に返す宮村

「あんな雑魚に殴られたつて何ともない」

俺も淡々と校長に返す

「くくく あっはっはっはっ 小林先生が雑魚か ふふふ」

大笑いする校長

「………何がおかしい」

「いやいや 小林先生は去年の不良達ですら恐れていたんだがね  
それを雑魚だなんて言うものだからね」

「奴の何がそんなに怖いんだ ただの筋肉ゴリラだろ」

俺がそう言つと何故か宮村が吹き出して背を向け笑いをこらえる

「ふふ 噂通りのようだね黒木くんは 誰にも懐柔されない狼みたいな生徒だと聞いているよ」

「知るか」

「ふふふ さてと小林先生が指導していた内容だがまあ宮村さんはトイレに行くと言任に告げていたようだ 黒木くんはどうかね」

突然温和だった空気が厳格な雰囲気になった

「……体調が悪くて風に当たっていた」

「そうかそれなら仕方ないね なら今回のことは2人共罰則は公には無しだいいかな2人とも？」

「はい」

いつの間にか落ち着いていた宮村が返事をする

「ああ 無いならそれでいい」

俺も無いなら構わないので同意する

罰が無い方がいいに決まっているだろ

「残念公には罰が無いだけだ さて丁度図書室に新刊が入荷するか  
らその整理を2人にはしてもらつよ 断つても別に構わないけど

ね

「……………分かりました」

「ツチ わかった」

宮村が嫌そうな顔を一瞬見せてすぐにそれを隠し了承した  
俺も嫌々ながら了承するこの爺厄介そうだな

「じゃあまだお昼を食べてないだろう早く食べに行きなさいじゃあ  
解散」

途端に重苦しい空気は無かったかのように元の温和な空気に戻った

校長の言葉を最後に

俺と宮村は職員室の扉まで行き職員室から出た

「はあく疲れた何だよあの校長」

職員室前の廊下で宮村が大きなため息を吐いた

「随分と俺の時とは態度が違かったな 校長も筋肉ゴリラもお前が  
嫌いな男だったか？」

「当たり前だろ 相手は教師なんだからさ こんなしょうもない事  
で反発したらめんどいだろ」

疲れた表情で言い返してきた宮村

「あああの愛歌って奴に被害がこないようにするためか」

「つな」

本当にビツクリした顔をする宮村

「まあその考えは正しいが教師だけじゃなく 生徒にも気を配っていた方がいいぞ」

「っけ 何であんたの言うこと聞かなきゃいけないんだよ じゃあな次会うときは問答無用で殴ってやるから」

そう言って廊下から姿を消そうとする宮村に警告しておく

「守りたいならあんまり目立たないことだ」

俺の警告が届いたかどうか分からないうちに宮村は廊下から姿を消した

職員室から離れながら携帯を取り出す

どうやら昼休みはまだ半分あるようだ

自動販売機で飲み物を買って

紫苑と京が居る屋上に向かうため階段を登る

## 第5話 呼び出し1（後書き）

どうだったでしょうか

作者的には少し失敗した感じがいたしました  
読みづらいような感じがして

今はコレが限界かも知れませんがこれからも

黒狼の朱よろしく願います

## 第6話 呼び出し2（前書き）

更新遅れてしまつて  
すいません

この小説を楽しみに待つてくださった方本当にすいませんこれから  
頑張つて早めに仕上げるようにいたします

では第6話どうぞ

## 第6話 呼び出し2

屋上へと向かう途中に

4、5人の男子生徒が階段を急いで降りてくる

男子生徒達の制服は所々薄汚れていた  
顔にも殴られたような痣がいくつもできていて  
中には鼻血を流しているのも居た

階段を降りながら言い合っている男子生徒達

「おい聞いてねえよ あいつら滅茶苦茶強いじゃんか」

「知らねえよ 俺だって先輩からあんな強いなんて聞いてねえし」

「あん時ちゃんとの女子盾にしとけばこんな目に遭わなかったの  
によびびって離しやがって」

「うるせえなお前等だってびびってたじゃねーか」

「そりゃしゃあねえだろ滅茶苦茶強いし怖いしだよ」

言い争いに夢中になっていている連中の横を通り抜け屋上へと登る  
登っているとだんだんと言い争いの声は聞こえなくなり

しばらく登っていると屋上の扉の前に着いた

取っ手に手をかけ扉を開けて屋上に出る  
視界に日の光が入り思わず目をつぶる継

高く上った太陽が視界を真っ白く染める

太陽の日差しに慣れ段々と白一色の世界から多彩な色の世界に移り  
変わる

視界に入ったのは職員室前で別れた筈の宮村と宮村に馬乗りになら  
れてる京

それを少し離れた位置で傍観している紫苑  
その横でオロオロしている宮村の友達だろっ少女等の姿だった

俺は紫苑と少女の近くまで行き紫苑に声をかける

「紫苑 何で京は宮村に襲われてるんだ？」

俺がきた事に気づいてなかった紫苑は吃驚した顔で話し出す

「うわっ 何だ 継か あゝなんつうか自業自得だな京の」

そう紫苑が呆れた顔をして継にかえす

「そうか ならほっとこっ」

ぐいっ

突然今まで黙っていた少女如月愛歌が継の制服の袖を引っ張り懇願

する

「あつ あの先輩朱音ちゃんを止めてください沢田先輩にも頼んだんですけど止めてくれなくて」

「知るか お前か宮村にでも口説いてたんだろ」

そう適当に継は言ってみたがどうやら当たっていたらしく 如月愛歌はえつと困った表情になる

「でつでも先輩達には助けてもらったし・・・」  
「いいつて如月さん 京がナンパし出すのが悪いんだから自業自得だつてそれより座つて早く飯食おうぜ」

そう言つて俺にパンを寄越して座り俺と未だに困つたような顔をする如月に座れと手でジェスチャーをする紫苑

「でも・・・」

それでも宮村と宮村に殴られている京を見やる少女

「あつ けいヘルプ しぬ オレしぬ助けてつて」  
今になって継が来たことに気づいた京は宮村に殴られながら継に助けてを求める

宮村は殴る事に夢中になつて継に気付居てない様子

そう言や次会つたらまた殴るとか言つてやがったな宮村  
どうすつかなあ………めんどくせえが京を助ける  
かこんな京の悲鳴が鳴り響いた所で飯なんか食えねえしいい加減昼  
休み終わつちまうし

そこまで考え宮村達の元へ向かう継

「ツチ　そこまでにしとけ」

ガシツ　宮村が京を殴ろうと振り上げた腕を掴む

「っな　っつ　何でテメエ　がここにいんだよ」

宮村が振り向き俺に気づいたようで驚いた顔をして言う

「………飯を食いに屋上に来ただけだ」「なら邪魔すんなよ  
愛歌に迫ったこの野郎殴らなきゃ気が済まない　それともてめえ  
がやるか？」

宮村は敵意を持った目を継に向ける

「………はあゝ　女と喧嘩する趣味はない」

継はそれに動じることもなく淡々と言う

「テメエあたしが女だからってバカにしてんのか」

継の言葉にバカにされたと思った宮村が声を大きくして怒鳴る

「宮村さん京を殴るのは別にいいけど　昼休み終わるぜ　いいの？  
如月さんと飯食いに来たんでしょ」

放っておくと言った紫苑がパンを食べながら宮村に言う

「っ ッチ いいか愛歌に次何かしてみろもつと痛い目に遭せるかな」

紫苑の言葉にイラつきながらも従う事にしたように

京を睨めつけながら脅して如月愛歌の隣まで行き弁当を如月から受け取り座って一緒に食べ始める宮村

宮村に脅された京は苦笑いをしながら立ち上がり服に付いた埃を落とす

埃を落とし終えた京は紫苑の隣へ座りパンを食べ始める

宮村は紫苑の隣に座った京を睨みつける

奇妙な光景だと継は思った

京の隣に紫苑 その二人の前にちよつと離れて宮村と確か如月愛歌だったか？ の二人が座って対面するような形で昼食を食べている

ぐっうううう

腹が減りすぎて胃が食べ物を催促してきたので京の隣に座りパンを

食べ始める継

黙々と食べる5人

和気あいあいとした風はなく殺伐とした昼食だった

やがて昼食を食べ終え多頃に昼休みの終了のチャイムが鳴る

未だに座っている5人の中で京が口を開いた

「飯も食い終えたし行きますかあ〜 継 紫苑」

「有耶無耶になったがお前はする事があるだる京」

継が静かに言う

「あはは あ〜 愛歌ちゃん 朱音ちゃん さっきはゴメン」

継に苦笑いをしていた京が愛歌と朱音に向き直り苦笑いから真剣な顔をして謝罪する

「えっと もういいですよ堂島先輩 助けてもらいましたし  
ほら朱音ちゃん」

「・・・・・・・・・・」

そう愛歌が微笑みながら京を許す

しかし朱音はムスツとした顔して言葉を発さないそれに愛歌が肘で軽くつつき言葉を促す

「ツチ さつきあたしが言った事忘れんなよ あと名前で呼ぶな？」

促されてムスツとした表情を崩さず京に宣告する

「肝に命じとくよ〜」

そう苦笑しながら答えた京

「んじゃまあ帰ろつぜ授業が始待ってるし」

話しが終わったのを見計らって紫苑が解散しようと言いつ

継達5人はそれぞれの教室に向かうため屋上を後にした

第7話 図書室（前書き）

更新遅くなりましてスイマセン

この後の話の構想と期末テストもあって書くのが遅れました

誠にすいません

では第七話お楽しみください

## 第7話 図書室

昼休みが終わり

2年1組の教室に戻った継と京は自身の席にそれぞれ着き

京は机に教科書などを出した後携帯を取り出しメールを打ち出す

継は机に何も出さず目を瞑りいる。

そんな継に授業を担当する教師は何も注意せずそのまま授業を続ける。

五時間目も六時間目そつしたまま終わり

現在放課後

生徒がまだ下校せずに思い思いの事をしていると放送が入った。

(1年2組宮村朱音 2年1組黒木継は図書室に集合しなさい)

内容は継と朱音を図書室に呼び出すものだった。

「おゝ何もしかして 罰ってやつかい継」

察したようににやつきながら継に尋ねる京

「ああ だから先帰っててもいいぞ 紫苑にもそつ言っとけ」

そう言い鞆を持って教室から出て行くこととする。継に京は後について行きながら言う

「いや俺も図書室で待ってるよ。多分紫苑も暇だから来るでしょー」  
にやつきながら紫苑にメールを打つ京に継は短く返答する。

「勝手にしろ」

「おっやっぱ来るってよ。紫苑も」

送信したばかりの携帯にすぐに送られてきたメールを見て京が継に教える。

2人はそのまま図書室へと向かう。

## 図書室

図書室に入った2人

図書室には継と京の他に4人が居た。

1人は先に来ていたらしい紫苑

1人は図書室の司書教諭で後の人は朱音と愛歌の2人だった。

継と京を合わせた6人以外は図書室に人はいなかった。

本を貸し出しする受付の所に居た司書教諭が今さっき入ってきた継と京に口を開く

「あなた達のどっちかが黒木君？」

「俺が黒木だ」

そうダルそうに司書教諭にかえしながら

図書室の中の方へと進んでいく。

京もその後に付いていく。

怒鳴りながら言う朱音は愛歌と継の元を離れ  
受付の中にあつた段ボールを持つてくる。

継も朱音の後に続き段ボールを取ってくる。

2人は手頃なテーブルに段ボールを置き中から新冊を取り出し整理  
を始める。

「そう 校長先生から話は、聞いているわ 新刊の本の整理お願い

するわね。詳しいことはさっき宮村さんに話したから聞いといて私は私用で帰らしてもらってから終わったら鍵は職員室に返しといてくれればいいわ それじゃあよろしくね。」

長々と言い終わるや直ぐに図書室から出て行ってしまった司書教諭。

それを見送った後、継は朱音と愛歌の元まで行き声をかける。

「で何をどうすればいい？」

それを後ろからにやついて見ている京は紫苑の元まで行き2人揃って近くに用意されてあった椅子に座り成り行きを見守る。

「ああ 本に貼り付けられてる紙見て指定された所に持ってきてください さっさっとしろよ。」

「ああ。」

そうして直ぐに本の整理を始める2人

継と朱音にそれ以降会話は無く黙々と整理を続ける。

本の整理を始めた2人にする事がなかった愛歌は紫苑と京が座る席まで行き2人と対面するような形で座りやがて談笑し始める3人

「ツチ。」

暫くして本の整理に集中していてそんな3人に気付かなかった朱音

は静かにそれに無言で愛歌と談笑している紫苑と特に京を睨みつける。

そんな不機嫌さを隠そうともしない朱音に継が後ろから数冊の本を持ったままダルそうに声をかける。

「宮村、其処にいと邪魔だ それと紫苑がいるからお前の友達にナンパなんぞさせないから安心しろ。」

「あゝあゝ？それを信用しろっていつてんのかよ？」

後ろに振り返り不機嫌さを隠さずに反論する朱音

継が言葉を発そうとしたとき図書室のドアが開かれ1人の生徒がゆつくりと中へと入る。

そんな生徒に継や朱音は勿論談笑していた3人までもが視線を向ける、視線に臆することもなくキョロキョロと辺りを見渡しやがて視線が継を捉えると生徒が口を開く

「やあゝ 継今日はスカウトしにきたよゝ」

そののんびりと発せられた言葉に継は嫌そうに顔を歪める

第8話 スカウト（前書き）

更新いたしましたあ

## 第8話 スカウト

「そんな嫌そうな顔しないでよ」継。  
継の嫌そうな顔に困った風に言う生徒。

「今日だけの話じゃないだろ神崎。」

ただ淡々と返す継に今度はニコニコとしながら継に言う。

「ひどいなあ」先輩を敬うでしょ」普通。」

「敬う必要がない。」

そんな継の物言いに苦笑する継達の先輩つまりは3年の神崎は表情を一変させ言葉を発する。

「まあ、敬う敬わないはどうでもいいや いい加減銀の下に就いてくれない？紫苑と京も一緒に。」

急に雰囲気が変わった神崎に入学したばかりで神崎と面識がない愛歌と朱音は蚊帳の外にも関わらず困惑した表情を見せた。

神崎と面識がある継達3人はただ視線を神崎に向けるだけで動揺も感じられずやがて継が答を返す

「俺は誰にも従う気はない。」

「紫苑と京は？」

はつきりと答えた継から視線を愛歌という京と紫苑に向ける神崎。

「継と同じだよ神崎さん。」

「隣に同じ」。

短く真剣に答える紫苑に若干ふざけて答える京

「そっか、なら気をつけなよ君達は狙われてもしょうがない 勿論君達の彼女さん？も狙われるかもね。」

そう言いながら勘違いしている神崎は愛歌と朱音の2人をチラリと見やる。

その視線の意味に気づいたのかさつきまで困惑していた朱音は、不機嫌そうに否定する。

「ちげえよ あたしと愛歌はこいつらの彼女じゃねえ。」

「あれゝ違うの継?」

真剣な雰囲気からまた一変して最初ののんびりとした口調に戻る神崎は継に真意を問いかける

「ああ そもそも宮村が彼女つてのは無いな。」はあっと溜め息を吐きながらそう朱音を指差した継に額に青筋を浮かばせワナワナと体を震わせる朱音。

「あたしだつてあんたみたいにな奴と誰が付き合うか。」

そう声を大にして宣言する朱音に継は淡々と反論し直ぐに朱音と継の言い争いが始まってしまった

そんな光景に愛歌は心配そうに継と朱音を交互に見やり

紫苑と京はどこか驚いた風も苦笑し

神崎までもがあははと苦笑していた。

言い争いが終わらないと思ったのか神崎が口を開いた。

「継も帰るわ」  
気が変わったら言いに来てね。んじゃ紫苑と京に女の子達も、じゃね。」

ガラガラ      バタン

そう言うだけ言って継と朱音の騒動を放って図書室から去っていく神崎に言い争いを止めて消えていった扉に視線を送る継に紫苑がぽつりと言う。

「言うだけ言って帰っちゃったな神崎さん。」

「いつもの事だろ。      宮村さっさと終わらずぞ。とつと帰りたい。」

「うるせえな、言われなくたって分かってんだよ黒木もとつとやれよボケ。」

そう言ってまた言い争いをしながらも本の整理をする2人をまた愛歌は心配そうに紫苑と京は苦笑しながらそんな2人を眺め整理を終えるのを待つ3人。

ゆっくりと日が傾いていく。

第8話 スカウト（後書き）

感想是非是非お願いします

第9話 黒木家長女（前書き）

大分遅くなりましたでしたそれではお楽しみください？

## 第9話 黒木家長女

図書室で本の整理を終えた継は自分の部屋のベッドに寝転がって何をすることもなくボーっと天井を眺めていた。

ドンドンっと部屋の扉からドアを叩かれる音がした。

「けいー入るわよっと。」

部屋の主である継の許可を得る前に継がいる部屋へと入る女。

「まだいいとも言っていないのに入るな姉貴。」

「まあまあそんなキレイないで、あんたのチェーン買ってきてあげたんだから。」

そう未だベッドに寝転がっている継に言う女、黒木家長女にして黒木継の姉の黒木ルナ

「チェーンって何のだよ？」

やっとベッドから起き上がり腰掛けるようにしてルナを見た時、キーンと小さな金属音が継の胸元からしてベッドにポフツと小さな音をたて何かが落ちた。

その小さな音に目を向ける継とルナ2人の視線の先に在るのはベッドの上で鈍く光る黒い指輪だった。

視線を継に再び向けルナは指輪によって途切れた会話を再開させる。

「何って継の指輪のチェーンでしょ。この間見た時大分ボロくなつてたから買ってきたんだけどちょうどよかったわね。ホレツ」

そう言つて指輪を拾い上げて大事そうに握りしめていた継にチェーンを投げ渡す。

チャカつと物音をたて継の片方の手にネックレス用のチェーンが手の中に収まる。

「悪いな姉貴。」

「はいはい てか今日ご飯何継？」

継にお礼を言われたルナは適当に返しながら話題を変える。

「面倒だからパスタとかでいいか？」

「んゝまあいいけど味は和風系にしてね。」

「わかった。」

そう言つて立ち上がり部屋から出ていく継その後が続いてルナも継の部屋を後にする。

部屋を出て継はリビングに入りそのままキッチンへ向かい調理をするために冷蔵庫の中身を確認し出す。

ルナはリビングのソファアールへと寝転びテレビを見始める。

材料を確認し終えた継は、本格的に調理を始める。

カチャカチャ カチツと、ガスコンロの火を着けて大量の水を入れた鍋をコンロの上に置き沸騰させ、その間に冷蔵庫から取り出した鶏肉や茸を包丁を使って切り始める継。

そんな調理をする継の姿は面倒くさそうにはいるが今時の男子高校生にはない手慣れた感じで、どんどんと調理をしていく一口サイズに切った材料を油を浸したフライパンに入れていき炒めていく。そうして調理していくこと30分程で和風パスタが完成したようだ。

「姉貴、飯できた。」

そう言うって料理の盛られた2つの皿を持ってソファーに寝ころんでテレビを見ているルナの所まで来て声をかける。

ルナの前にあるテーブルに料理の入った皿を1つ置き少し離れた所に自分の分の皿を置いて皿の前に腰掛ける。

「いただきます。」

二人が同時に言いフォークを持ちそれぞれのペースで食べ始める。

「そっいえばさ継？」

食べるのを一時止め継に質問をしようとしたルナ。

「なんだ？」

「継彼女出来たのかなあって。」

「……………付き合う資格がねえよ。」

「ふーんそっか いつかできるといいね。」

求めていた答えが返ってこなかったのかどこか不満そうに言うルナ。

「できねえよ、今もこれから先も。」

継が言葉を発したのを最後に二人の会話は終わりテレビの音と食事を  
する。

「「ごちそうさま。」」

あれから会話は無く夕食は終了し継はルナが使った食器と自分が使  
った食器を持って再びキッチンに行き洗い物を始める。

「継、茶。」

継が洗い物初めて少したった頃夕食を終えてから再びソファに寝  
ころびテレビを見ていたルナが継にお茶を要求する。

継は、無言で冷蔵庫を開け中に入っていた500mLのペットボト  
ルをソファに寝ころんでいるルナに投げ渡す。

パシッ

「おっとと、ありがと継。」

片手で受け取るうとしたルナは取りこぼしそうになったがしっか  
り掴み継にお礼を言ってから蓋を開け中のお茶を飲みまたテレビを見  
始める。

キュツと水を流していた蛇口を締め洗い終わった皿を乾かして棚に  
入れていく全部入れ終えてキッチンから出てソファにいるルナに  
声をかける。

「先風呂入ってくる。」

「はいよう出たら教えてよ継。」

「んっ。」

短く返事をし一端自室に向かって下着やパジャマを取り出し風呂場に向かう。

体や頭を洗って風呂から上がりルナに出たことを知らせ自室へ向かいベッドにそのまま寝転び目を瞑るその日はそのまま眠りについた。

## 第10話 小さな異変（前書き）

かなり遅れてしまいました。

これから、少しずつ更新していきます。

## 第10話 小さな異変

ちゅんちゅんちゅん

朝日がカーテン越しからベッドで寝ている部屋の主を照らす、部屋の主である黒木継は鬱陶しそくに毛布に潜り込み陽射しから逃れようとする。

ブーツブーツブーツ

枕元に置いてあった携帯から三回振動音がする。直ぐに毛布から手が出てきてその手が携帯を探す二度、三度とあらぬ方向を探していた手は携帯を掴みそのまま毛布の中へと引きずり込み携帯を開き継の耳元に押し当てられる。

「んっ……誰だ？」

「誰だは無いでしょ継君、京だつて。」

「あゝ、京か死ね朝に電話すんな。」

寝ぼけていた状態から完全に覚醒したようで京に辛らつな言葉を投げける。

「ちよっさらにひどくね？」

「で？要件は何だ京。」

京の言葉を無視し本題を求める継。

「そのまま進めんの！ はあまあいいや、要件は何か今日華北の1年がうちの学校に来るかもだと。」

「バカだろ。」

「まあ否定は出来ないね。銀さん達3年にタメの連中も滅茶苦茶強いもんなあ。継君はどうすんのかなあ?。」

「知らん。手え出してくんなら潰すだけだ。」

「まあ絶対狙われると思うけどなあ。ああ、そうだ紫苑には連絡していた。そんじゃ学校でね。」

「ああじゃあな。」

そう言つて通話を切り毛布を剥がしベッドから起き上がる。部屋から出て姉が眠る部屋へと向かう、姉の部屋の前で止まり扉を叩き姉貴を呼ぶ。

ドンっドンっドンっ

「起きろ姉貴朝だ。」

部屋の主である黒木ルナから返事はなく仕方なく継はルナの部屋に入る。部屋の中で待っていた光景はベッドで寝ている姉貴だった。姉貴が寝ているベッドまで行き姉を起こす。

「はあ、姉貴起きろ朝だつつの。」

「うっん、後5分寝かせて。」

毎度お決まりの言葉を言う姉貴に面倒になつて有無を言わさず布団

を引つ剥がす。

「ん〜寒っ、ちょっと寒いじゃん継。」

引つ剥がしたベッドの上にいたのは、Ｔシャツとパンツのみと言う俺が思うに女がするような格好じゃねえ、てかそんな格好でいりゃそりゃ寒いだろ。

「んな格好でいりゃあ当たり前だろうが、ホラッ。」

着ていたジャージを脱いで姉貴に渡す。

「んむ、ご苦労継、てか継のいい匂いするね。」

そう言つて俺のジャージを着た姉貴は人のジャージの匂いを嗅ぎ始め出した。

人の道を踏み外しかけてる姉貴を止めるべく若干強めにデコピンを額にお見舞する。

パコッ

「つついつたあ痛いつての継。」

「うるせえ、声でけえ、んな変態みたいな事してんのが悪いんだろ、飯作つてくっからリビングに降りとけよ。」

そう言い残して俺は姉貴を残して1人先にキッチンで朝食を作るため姉貴の部屋を出て階段を降りる。

俺は朝食を作るべくキッチンにいる、いつもの朝食を作るため冷蔵

庫から卵3個とスライスチーズを取り出し卵を割って溶き卵にしその後、フライパンに溶き卵を流し込み火をかけ、チーズを手で干切り熱された溶き卵にまぶしてかき混ぜる。  
出来上がった料理を皿に載せトースターに食パンを入れ焼き始める。焼きあがったパンを卵が乗った皿に乗せ姉貴がいるテーブルに料理を持って行く。

「出来たぞ。」

「はいはいうんうまそー。」

「いただきます。」

そうしていつもどおりに食事を始める。

俺の方が食べるペースが速く直ぐに食べ終わった。

「御馳走様でした。」

先に挨拶をして食器をかたす朝は色々忙しいので個々で挨拶する事になっている。

手早く食器を洗い学校に行く準備をする。

準備を終えて携帯を確認した所紫苑からメールが届いていた。

内容を確認するとどうやらちよつど家に着いたみたいで急いで玄関に向かい革靴を履き姉を残し家から飛び出した。

玄関を出た先には、紫苑が自転車に乗って待っていた。

「よう継、京から話聞いた？」

「ああ、はよ紫苑朝電話着た、来る途中見かけたか？」

2人は、朝の挨拶を交わすなり、京から着た情報について話し合う。継の問いに紫苑は、朝継の家に来るまでに、京が話していた華北の1年が居たかどうか紫苑の記憶の中に検索をかける。

しばらく記憶の中を探っていたが見かけていないようで首を振り紫苑は、継に告げる。

「いや見かけてないな、まあ取り敢えず乗れよ継さっさと学校行くこ  
うぜ遅刻しちまう。」

「ああ、悪いとつとと行くか。」

そう言つて継は、紫苑の自転車の荷台部分に乗り紫苑と継を乗せた自転車は学校へと向かって走り去って行った。

## 第11話 白峰狩り1

学校に向かうため紫苑の自転車に2けつして街の中を走る。

そうしてしばらく自転車を走らせていくと他校の制服を着たガラの悪い生徒が幾人か見かけ始める。

「なあ継さつきから知らん制服の奴等見かけたけど、絶対華北の1年だよな。」

「ああだな、しかもうちの学校の奴からカツアゲしてるみたいだ。」

「どうする継？やるか華北の1年坊。」

「ほつとけ喧嘩吹っかけてくるなら潰すけどな、まあ明後日辺りに銀さん等3年に潰されんだろ。」

それもそうかと紫苑は納得し華北の1年坊達を気にせず自転車を走らせていくが、血気盛んな華北の1年坊達は、愚かにも紫苑と継が乗る自転車の前に立ちはだかり通せんぼする。

仕方なく紫苑は自転車を一時停止させる、荷台に乗っていた継は面倒くさそうに降り紫苑と継を逃がさないように周りを囲み始めた華北の連中を見やる。

困んでいる華北の1年たちの中から1人集団のリーダー格が2人の前に出て話し始める。

「よお あんたら白峰の生徒だろ？俺ら今白峰狩りしてんだよね、でさあ白峰の頭の銀とか2年の黒狼ってこの辺で恐れられてる奴何処にいるか知らない？」

「さあね飯に知っててもお前らに教えねえよ。」

そう返した紫苑が気に食わなかったのか1年坊の1人が吠える。

「あゝっ？テメエなめてんのかこのアマぶつ殺すぞ。」

吠えた1年坊の最後の一言を聞いて紫苑は顔を下に向け震えだす。それを見ていた1年坊達は紫苑がビビッて震えているのだと勘違いして爆笑しだす、ただ1人紫苑が震えている理由を知る継は、これから始まる喧嘩に備え相手の人数や効率よく潰す方法を考え始めていた。

華北の1年坊達の人数は10人対するは紫苑と継の2人のみしかし、この2人が高々10人に敗北などあり得ない少数対多数は幾度もあったのだから。

そうして震えが治まった紫苑から開戦の合図が発せられる

「誰が女だ1年坊ども全員皆殺しだ糞野郎。」

そう言って目の前に立っているリーダー格の男とその隣に居た男目がけてドロップキックする。

ビビッて震えていると思っていた紫苑が突然怒鳴り声をあげた為呆然としていたリーダー格とその隣にいた1人は、紫苑のドロップキックに反応できずまともに喰らい吹き飛ばす。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8029o/>

---

黒狼の朱

2011年10月8日03時41分発行